

經濟論叢

第九十七卷 第三號

王莽の社会思想について……………穂 積 文 雄	1
アージリスの組織理論(2)……………田 杉 競	35
プレビッシュ報告批判……………松 井 清	51
プレハーノフの著作集について……………田 中 真 晴	68

昭和四十一年三月

京 都 大 學 經 濟 學 會

プレハーノフの著作集について

田 中 真 晴

I 『プレハーノフ著作集』

プレハーノフは1917年3月末日、37年間の亡命生活を終えて帰国し、2月革命後の激動のなかで、ソビエトからは疎隔し、また臨時政府の大蔵大臣就任の勧請をも断って、『エジnstヴォ』紙に拠ってブルジョワ革命の擁護・戦争継続論を唱えつづけたが、『エジnstヴォ』派は少数者のあつまりにすぎなかった。10月革命後においても、プレハーノフはボリシェヴィキの政権掌握は時期尚早であると批判したから、『エジnstヴォ』紙は発刊停止になり、プレハーノフの住居にソビエト兵が侵入するという事件もあり、ソビエト政府はプレハーノフの人身保護令を出したが、プレハーノフ夫人ロザリヤ・プレハーノヴァ(1856—?)はプレハーノフの身を案じてかれの身柄をペテルブルクのフランス赤十字病院に移し、さらに1918年1月、ペテルブルクからはごく近いフィンランドのテリオキのサナトリウムへ移した。プレハーノフは1880年代の半ばから結核にとりつかれていたが、病ようやく重く同年5月末、同所で62歳の生涯を閉じた。

プレハーノフの遺骨はペテルブルクに帰り、その葬列には多数の民衆が参加し、ベリンスキーの隣りに手厚く葬られた。かれの遺族はロザリヤと、彼女とのあいだにもうけた2人の娘であった。女ばかり4人うまれたが2人は幼折していた。

「ロシア・マルクス主義の父」プレハーノフの最後はそうしたものであったが、死後間もなく、プレハーノフ著作集の刊行が議題にのぼった。発議したの

1) プレハーノフの最後については、S. H. Baron, *Plekhanov, the Father of Russian Marxism*, 1963, pp. 337-361 に拠る。

はレーニンであつたらしい。レーニンは1918年8月、ルナチャルスキー（1875—1933）に対して、民衆版ブレハーノフ選集の準備を依頼し、さらにブレハーノフ全集の必要をも述べたと伝えられる²⁾。レーニンは1921年のはじめにも、ブレハーノフ著作集・哲学集の必要に論及している³⁾。『ブレハーノフ著作集』は、リャザーノフ編で第1巻が1920年に出たが、これは1905年の『ブレハーノフ著作集』第1巻の復刻である⁴⁾。そのあと、1921年にあらためて、マルクス・エンゲルス研究所の仕事として、リャザーノフ編で『ブレハーノフ著作集』が企画され、さきの第1巻とは内容の異なる第1巻が1923年のはじめ(序文は1922年11月)に刊行、1927年までに『ブレハーノフ著作集』全24巻《Г. В. Плеханов, сочинения》т. I—XXIV, изд. 2-е, Москва, 1923—27 が出された。『ブレハーノフ著作集』(以下『著作集』とよぶ)は、現在にいたるまでに刊行されたブレハーノフの著作集のうちで、もっとも網羅的である。

リャザーノフは編者序文において「このブレハーノフ著作集は全集であること为目标にしている⁵⁾」とその抱負を述べている。リャザーノフのいう全集の意味は、ブレハーノフの存命中にすでに印刷されていたものをすべて収録するという意味であった。

2) См. Литературное наследие Г. В. Плеханова. Об. I, 1934, стр. 5. ただし『レーニン全集』ではたしかめられない。

3) レーニンは「ふたたび労働組合について、現在の情勢について、トロツキーとブハーリンの誤りについて」(1921年1月)のなかで弁証法的論理学について論じている文脈において、「ついでにここで若い党员のためにつぎの点を注意しておくのが適当だろうとおもう。ブレハーノフの哲学にかんする著作のすべてを研究——まさに研究——することなしには、自覚ある、真の共産主義者となることはできない。なぜなら、これは、すべての国際的マルクス主義文献のうちで最良のものだからである」と述べ、さらにその注記において、「いま発刊されようとしているブレハーノフ著作集(リャザーノフ編『ブレハーノフ著作集』のこの)のうち、すべての哲学論文を抜き出して特別の1巻もしくは数巻にまとめ、それにごく詳細な索引その他をつけること。なぜならそれは共産主義の必読教科書に入れなければならないから」と書いている(『レーニン全集』第4版、邦訳、第32巻、92ページ)。

4) 『著作集』1920年版第1巻について言及したものをみないが、木原正雄氏がモスクワの古本屋から買って来て下さった『著作集』24巻補の第1巻がそれである。内容的には1920年版(=1905年版)第1巻が1923年版第1、第2の両巻にわかれ、かつ後者には前者にはない論稿が入っており、他方前者にだけあって後者には落ちてゐる論稿はない。あきらかに1923年版のほうが整備されている。なお、『ブレハーノフ著作集』24巻がふつう再版としてしめされるのは(私もその例にしたがうて)、1920年版の第1巻があるためかも知れない。

5) Г. В. Плеханов, Соч., т. I, стр. 7.

印刷されたものをすべて集めるのであるから、非合法出版物ももちろんはいる。ただ、プレハーノフによるロシア語訳（マルクス・エンゲルスのもをプレハーノフは相当多く訳している）は、原則としてはは入れない。プレハーノフがドイツ語、フランス語で書いた著作は⁶⁾、すでにそのロシア語訳があるものはそれを採り、ないものは編集部の手でロシア語に訳して載せる。これがプレハーノフの著作の収録範囲に関する編集方針であった。

著作の各巻への、および各巻内部での配列は、年代順を主としているが、テーマ別も併用されている。各巻のはじめには、その巻が前巻の続きでないかぎり、リャザーノフの短い編者序文がつけられている。編集部の注は、収録著作の出典をしめすかたんな脚注に限られていて、くわしい解題や索引の類はない。大きさは1巻平均400ページぐらい、24巻計1万ページに近い。全巻の総目録をかかげるのは繁に過ぎるであろう。わたくしは、プレハーノフの著作の種類とそれぞれの量とを概観するために、各巻の内容を摘記した表をつくってみた。つぎにかかげるのがそれである⁷⁾。

『プレハーノフ著作集』の要覧

I 1883年までの論稿（ナロードニキの時期）

1878—1883年の論稿。「社会の経済的發展の法則とロシアにおける社会主義の任務」（1876）、「土地共同体とそのありうべき将来」（1880）、「カール・ロートベルトゥス・ヤグツォフの経済理論」（1883）、その他概文をふくむ。

II 1883—1888年の論稿。「労働解放」団の創設から「ロシア社会民主主義同盟」の結成まで

「社会主義と政治闘争」（1883）、「われわれの意見の相違」（1885）、「労働解放」

6) プレハーノフは、*Anarchisme et socialisme*, 1894, その他をフランス語で書き、*N. G. Tschernischewsky, eine literar-historische Studie*, 1894; *Beiträge zur Geschichte des Materialismus*, 1896. のほか、『ノイエ・ツァイト』誌に1891年以降、10以上の論稿をよせている。ただし、後に述べるプレハーノフ文書の資料によると、プレハーノフがドイツ語で発表した著作の多くは、原稿をフランス語で書いて誰かにドイツ語訳してもらい、それを校訂したものである。См. Г. В. Плеханов, *Избранные философские произведения*, т. II, стр. 728, 761, 771, 774, 778.

7) 要覧のなかの著作の日付は大体は刊行年である。

団の「綱領」, 「第二次綱領草案」, その他ロシア・マルクス主義創設期の論稿。

III ロシア問題, 1888—1892年

上記期間の論稿のうち, ロシアをテーマにしたものを収録。「専制主義のあたらしい擁護者」(1889), 『ソツィアル・デモクラート』(1890)の「国内評論」, 「全ロシア的破産」(1892), 「ロシアにおける飢饉との闘いにおける社会主義者の任務について」(1892), その他。

IV 国際問題, 1889—1894年

上記期間の論稿のうち, ロシア以外のテーマのものを収録。「フェルジナンド・ラッサール」(1888), 第2インター創立大会その他での演説, メーデー関係論稿, 『ソツィアル・デモクラート』(1890)の「外国評論」, 「無政府主義と社会主義」(1894), その他。

V チェルヌィシエフスキー (第1巻)

第5, 6巻には1890—1913年に発表したチェルヌィシエフスキーに関する諸論稿を一括して収録。論文と著書で重複する部分は削除。「チェルヌィシエフスキーとかれの時代」(1880—94), 「チェルヌィシエフスキー, 第1部, チェルヌィシエフスキーの哲学・歴史・文学観」(1909)。

VI チェルヌィシエフスキー (第2巻)

「チェルヌィシエフスキー, 第2部, チェルヌィシエフスキーの政治観と経済観」(1909), 「チェルヌィシエフスキーの美学理論」(1897), 「シベリヤにおけるチェルヌィシエフスキー」(1913), その他。

VII マルクス主義の基礎づけと擁護 (第1部)

第7, 8巻には史的唯物論・弁証法的唯物論を体系的・哲学史的に基礎づけた論稿を収める。「ヘーゲル死後60年によせて」(1891), 「史的一元論」(1895), メチニコフの書評と追悼。

VIII マルクス主義の基礎づけと擁護 (第2部)

「唯物論史概説」(1896), 「経済的唯物論の擁護のための教言」(1899), 「歴史の唯物論的理解について」(1897), 「歴史における個人の役割」(1898), エンゲルス「フォイエルバッハ論」の翻訳序言と訳者注(1892, 1905), 他2篇。

IX ナロードニキ主義批判

1890年代中葉の, 主としてナロードニキ批判の論稿を収録。トゥンの書評(1893),

エンゲルス『ロシア論』ロシア語訳への序文(1894)、「ヴォロンツォフ氏の諸労作におけるナロードニキ主義の基礎づけ」(1896)、「体制変革前夜のロシア」(1894—95)、その他。

X 文学批評論稿, 1888—1903年

「ウスペンスキー」(1888)ほか2論のナロードニキ小説家論、「経済的現実の反映としての悲観主義(チャダーエフの悲観主義)」(1896)、「ベリンスキーと合理的現実」(1897)ほかベリンスキー2論、「ネクターソフ」(1903)、その他。

XI われわれの批判者の批判

1898—1902年の修正主義批判論稿。「ベルンシュタインと唯物論」(1898)ほかベルンシュタイン批判3篇、「マルクス・エンゲルスに反対するシュミット」(1898)ほかシュミット批判2篇、「ストルーヴェ批判」(1901—02)、「階級闘争理論の起源」(1900)、他に書評8篇。

XII 綱領と戦術の問題, 1900—1903年

経済主義批判の『必携』への序文(1900)、1902年2月—1903年10月の間の『イスクラ』および『ゼリャー』けいさいの計31の論稿、ロシア社会民主労働党第2回大会での演説。付録として「党綱領草案」など。プレハーノフがメンシェヴィキの側に移るまでの論稿を取めている。

XIII 戦術問題, 1905年革命の前夜(1903—1905年)

前巻につづく時期すなわちレーニンと決裂後の『イスクラ』けいさいの29篇。メンシェヴィキとは別の自己の機関誌『社会民主主義者日誌』けいさいの10篇、その他。

XIV 芸術と文学

第10巻と同じグループであるが、芸術論をこの巻にまとめたため、年代的には第10巻に先立つものをふくむ。「宛名のない手紙」(1899—1900)、「社会学の視点からみた18世紀フランス戯曲文学と絵画」(1905)、「ヘンリック・イブセン」(1906)、「芸術と社会生活」(1912)、他5篇。

XV 第1次革命の時期における戦術問題(1905—1908年)

1905年10月以降、1908年におけるメンシェヴィキとの新しい決裂にいたるまでの戦術問題関係論稿37篇、ストックホルム大会およびロンドン大会における演説、第2インター、シュトゥットガルト大会での演説、その他。

XVI 社会主義と労働運動の諸問題

第1革命以後の論稿のうち、サンジカリズム批判5篇、アナーキズム批判4篇、エンゲルス『フランスおよびドイツにおける農民問題』ロシア語訳への序言(1904)、「マルクス死後25年」(1908)、第2インター、コペンハーゲン大会」(1910)、その他。

XVII 経験一元論および求神主義の批判

弁証法的唯物論からの諸偏向と宗教の復権に対する批判の論稿(1907—11)。第1部哲学。「戦闘的唯物論」(1908)ほか書評9篇。第2部宗教。「ロシアにおけるいわゆる宗教的探求について」(1909)ほか書評7篇。前巻とともに『防禦から攻撃へ』(1910)所収論稿が中心である。

XVIII 空想から科学へ

空想から科学への社会主義の発展の系列として、「ルソー」(1912)、「19世紀の空想的社会主義」(1914)、「19世紀のフランス空想的社会主義」(1913)、他1篇。「マルクス主義の根本問題」(1908)他4篇のマルクス哲学関係論稿。

XIX 解党主義に対する闘争、1909—1914年

内容は第15巻につづく。メンシェヴィキとの決裂後、第1次大戦勃発までの戦術関係論稿。『社会民主主義者日誌』その他にけいさいの計57篇と第2インター、コペンハーゲン大会での演説など。

XX ロシア社会思想史、第1巻

1909年に着手、未完におわった大著「ロシア社会思想史」の完成部分「第1部、序説。ロシアの社会関係の発展の概説」(1914)、「第2部、ピョートル以前のルーシにおける社会思想の動き」(1915)を収む。

XXI ロシア社会思想史、第2巻

「第3部、ピョートル改革後におけるロシア社会思想の動き」(1916)。エカテリーナ2世の時期をあつかった第6章までを収む。

XXII ロシア社会思想史、第3巻

「第3部、ピョートル改革後におけるロシア社会思想の動き」(つづき)。第9章までは1916年刊。第10—13章は著者歿後に刊。「第13章、ラジーンチーフ」は未定稿。

XXIII 19世紀におけるロシア社会思想の歴史(資料)、第1巻

「ロシア社会思想史」の19世紀の部分の資料になるはずであったと考えられる、著者の1908—1912年の既刊論稿を収む。「チャーダーエフ」(1908)、「ベリンスキーについて」(1910)、「ゲルツェンと農奴制」(1911)、他13篇。

XXIV 19世紀におけるロシア社会思想の歴史(資料)。第2巻, 60年代から90年代まで。

「ロシア社会思想史」の前巻の部分の続きの資料となりうると考えられる論稿を集める。農奴制の崩壊、70-80年代の革命運動など8項目において、「農民の『解放』」(1911)、「マルクスとトルストイ」(1911)ほか16篇を排列。付録として13篇。

著作集というものが一般にそうであるように、『著作集』の巻別構成も各巻の大きさをほぼ等しい適当な大きさにするという技術的考慮に規定される面もっているから、巻別構成はただちにプレハーノフの著作の内的構成と一致するとはかぎらない。したがって、プレハーノフの著作の諸系列を考えなおし、内的関連にもとづいて再構成するという問題がある。しかし実はこの問題は、プレハーノフに対する研究の進展に応じて解かれてゆくほかないものであって、あらかじめ体系的に答えることはできない。ここでは、『著作集』の要覧を手掛りにしてつぎの点だけを指摘しておこう。

プレハーノフの著作のなかで哲学が占める比重の大きさは、上の要覧からも看取できる。「哲学」の範囲をどのように考えるかはかならずしも一義的でないけれども、初期の著作における哲学思想はしばらく措くとして、90年代には唯物史観、唯物弁証法をテーマとする著作が数多くみ出され、『著作集』第7, 8巻を占めている。そのなかの代表作はやはり『史的一元論』(1895)であろうが、この書についてもまた他の著作についても知られるように、90年代においては唯物史観が中心であり、批判の対象はひろい意味でのナロードニキのマルクス主義批判であった。それらの著作におけるプレハーノフの方法の特徴は、近代西欧哲学史(とくにフランス唯物論)に対するひろい知識を駆使して、史的唯物論の必然性を哲学史的に展開してみせるところにある。その意味で、近代西欧哲学史はプレハーノフの哲学関係著作の本質的構成部分である。そのばあい、近代西欧哲学史は社会主義思想史と接続し重なりあう部面もっている。さらにプレハーノフは1880年代末-1890年代はじめから、ロシア思想史の

仕事を始めているが、そのなかには、哲学史、社会思想史その他のものがふくまれている。

1898年から、ナロードニキにかわってベルンシュタイン(1850—1932)的修正主義がブレハーノフの主たる批判の対象となる。かれはドイツおよびロシアの修正主義を批判する論稿を1903年まで矢つぎばやに書いた。『著作集』第11巻に収められているのがそれであるが、主たるものは哲学である。

ついで、第1次ロシア革命から第1次世界大戦勃発にいたる時期においては、経験一元論および求神主義というかたちでのマルクス主義修正に対して、マルクス主義哲学の構造を体系的にしめす『マルクス主義の根本問題』(1908)を中核にして「戦闘的唯物論」(1908)その他の論争的著作を多く書いている。『著作集』第17巻の全部と第18巻の一部がこれに属する。ナロードニキ批判のばあいには唯物史観が中心論題であったが、ベルンシュタイン的修正主義の批判においては、認識論がそれと並ぶ重要論題として登場し、経験的一元論等の批判においては、認識論と唯物弁証法が主となる。ただし、唯物弁証法はナロードニキ批判のばあいにも基礎にあった。あとになってはじめて云い出したというのではない。論争の中心点したがって論究の中心点の在りどころが推移したのである。その間に、ブレハーノフの哲学そのものに微妙な変化があったのか、なかったのかという問題は、もちろんここでの論域を越えている。

さきにも指摘したように、どこまでを哲学の著作とすべきかは一義的ではない。分類というものはつねにいくらかは暴力的である。『著作集』第7、8、17巻の全部と第11巻の大部分、第18巻の一部がせまい意味での哲学・近代西欧哲学史であるのに対して、第18巻の大部分の西欧社会主義思想史、第5、6巻のチュルヌィシェフスキー論、第20—24巻のロシア社会思想史は、哲学史をふくむ社会思想史というべきであろう。

文学・芸術論は第10、14の両巻に収められている。それはマルクス哲学の適用・具体化であるにしても、哲学そのものとは別な一領域とみてよいであろう。第10巻はロシア思想史の側面をもっている。

たしかに、プレハーノフの著作活動において、哲学は中枢的な位置を占めている。そのことは、哲学的著作の量だけでなく、哲学を中心として、そこから西欧およびロシアの思想史、また文学・芸術論が展開されてゆくことに見られる。これとが事実の一面である。しかし同時に他面では、いかなる意味においても哲学ではない著作が予想外に多いことも、『著作集』の要覧から知られるであろう。

プレハーノフはなによりもまず革命家・革命理論家であった。哲学論文を書きはじめるとなれば、ロシア革命論へと集約される現状分析的論稿をたくさん書いている。そして、経済理論関係の論稿もそのなかに見出される。プレハーノフは1880年代の半ばまでに、ロシア・マルクス主義の基礎づけという大きな理論的仕事をやりとげていた(第1—3巻)。わたくしはそれについては「プレハーノフのロシア資本主義論」(1), (2), (3) (『経済論叢』第89巻第5号, 第90巻第4号, 第91巻第3号)ですでに論究した。

プレハーノフはロシア・マルクス主義の理論的基礎づけを一応終えたあと、哲学、文学・芸術論の分野に入りこんでいったが、だからといって、経済学および現状分析、綱領・戦術論がなくなるわけではけっしてない。1890年代において、チュルヌィシェフスキーの経済学の検討(第6巻)、ロシアの階級分析および飢饉論(第3巻)、ナロードニキ・ロシア資本主義論批判の継続(第9巻)があることを忘れてはならない。

プレハーノフは修正主義論争においては主として哲学の分野で筆をとったけれども、ロシアにおける修正主義の代表者ストルーヴェ(1870—1944)の批判においては、資本主義の発展傾向について、相当の量をあてて論じている(第11巻)。かれはそのストルーヴェ批判とほぼ同時期に、レーニンと緊張をはらみつつも協力して、『イスクラ』編集部で活躍するが、1903年の第2回党大会までに、綱領草案を中心にして多数の綱領・戦術関係論稿を書いており(第12巻)、そのなかにはロシアの現状分析に関するものがすくなくない。同じことは、1903—1905年について(第13巻)も、1905—1908年について(第15巻)も、程度は

劣るが、1909—14年について（第19巻）もいえるのであって、綱領・戦術論関係論稿のなかには、当然、ロシア経済論がふくまれている。

最後に、ロシア社会思想史の労作（第20—24巻）についていえば、その方法的序説はロシア社会経済史論であるし、本論は、西欧思想のロシアにおける意味に注目しての、社会史的社会思想史である。そのなかにはロシア重商主義の代表者といわれるポソコフ（1652?—1726）などがとりあげられているだけでなく、一般に経済思想にはよく注意がはらわれているようである。

このようにみえてくると、さしあたりつぎのようにいうことが許されるであろう。プレハーノフに経済学——理論体系としての経済学——を求めることは、ほとんど意味がない。価値・価格・再生産論というような経済理論プロパーにおける創見の点ではプレハーノフはメリットをもたないから、経済理論史としての経済学史はかれをとりあげる必要はない。しかし経済思想史の立場からはプレハーノフは重要である。経済思想史とはなにかを正面からここで論じることが出来ないが、経済思想史にはいろいろ型がありうらと思う。わたくしがここで考えているのは、消極的な規定としては、経済理論史でないということ、積極的には、現状分析・歴史分析を包括する政治経済思想の史的展開のことである。いますこし具体的にいえば、マルクス経済学の現状分析のディメンションにおける展開史、しかし同時に史的唯物論の領域にもまたがるような規模での、展開史である。それは、ひろい意味での経済学史といってよい。そのなかには経済理論もひとつの契機としてはふくまれている。しかし経済理論を焦点としてそこへと集中してゆくのではないという点で、また思想が中心的であるという点で、経済思想史というのがふさわしいであろう。ソビエトにおける最近の経済思想史では、プレハーノフをとりあげるのがふつうであるし⁸⁾、プレハーノフの経済思想に関する論文だけではなく、『プレハーノフの経済観』（ブ

8) История русской экономической мысли, т. II, ч. 2, 1960, стр. 120-130. 「ロシアにおけるマルクス主義の開拓者プレハーノフの経済的労作」と題するこの章の筆者はポリャンスキーである。С. И. Крадинский, Очерки по историографии экономической истории, 1964. のとき小著においても、там же, стр. 228-233, その他で論及されている。

ローヴェル),『プレハーノフとロシア経済思想』(ポリャンスキー)といった研究書も出ている⁹⁾。また西側でのバロンのプレハーノフ研究は、政治思想中心ではあるが、経済思想にも相当の力を注いでいる¹⁰⁾。

しかしここでプレハーノフ研究に立ち入ることはできない。ただつぎのことだけをいっておきたい。プレハーノフの経済思想の研究は、プレハーノフの著作のなかの経済あるいは政治経済的論稿だけの研究に終ってはなるまい、ということがそれである。もちろん、経済あるいは政治経済的論稿が第一次的である。しかし、プレハーノフの経済思想はかれの哲学とまったく無縁のものではあるまい。もちろん、プレハーノフの哲学論をかれの政治経済論の基礎づけとしてだけみるのも、また反対に、かれの政治経済論をかれの哲学論の系や具体化としてだけみるのも、ともに誤りであろう。区別を抹殺する還元主義はいずれの方向におこなわれるにしても真実をとらえる方法とは思われぬ。しかし、プレハーノフの哲学とくに唯物史観論と政治経済論とのつながる面を、したがってまた、現状分析と歴史認識とのつながりをとらえることなしには、プレハーノフの経済思想の研究は十分なものにならないと思う。これまでのプレハーノフの経済思想研究にはその点が不足している。

さて、『著作集』にもどろう。『著作集』の限定面について書きくわえておくことがある。わたくしはさきに、『著作集』は、非合法出版物もふくめて、印刷されたプレハーノフの書き物をすべて(翻訳は別として)収録することを方

9) И. М. Бровер. Экономические взгляды Г. В. Плеханова. 1960. 231 стр. および本稿執筆中に到着した Ф. Я. Полянский. Плеханов и русская экономическая мысль. 1965. 472 стр.

10) 注1) にあげた書物およびつぎの諸論文。S. H. Baron, "Plekhanov on Russian Capitalism and the Peasant Commune, 1883-1885", *American Slavic and East European Review*, Dec. 1953, pp. 463-474; "Plekhanov and the Origins of Russian Marxism", *Russian Review*, Jan. 1954, pp. 38-51; "The First Decade of Russian Marxism", *ASEER*, Oct. 1955, pp. 315-330; "Legal Marxism and the 'Fate of Capitalism' in Russia", *ASEER*, Apr. 1957, pp. 113-126; "Plekhanov's Russia: the Impact of the West upon an 'Oriental' Society", *Journal of the History of Ideas*, June 1958, pp. 388-404; "Between Marx and Lenin: George Plekhanov", in L. Labedz, (ed.), *Revisionism*, 1962, pp. 42-54; "Plekhanov and the Revolution of 1905", in J. S. Curtiss (ed.), *Essays in Russian and Soviet History*, 1963, pp. 133-148.

針としていたと述べた。だが実は、この当初の方針は完全には実現されなかったのである。さきにかかげた『著作集』の要覧をすこし注意してみられるならば、プレハーノフの綱領・戦術関係論稿の収録が第1次大戦勃発時でおわっている(第19巻)ことに気づかれるであろう。実は、再版第1巻の序文でリャザーノフが書いている計画では、『著作集』は26巻から成り、第24、25巻は「プレハーノフの社会愛国的主義的時期の論稿」すなわち、第19巻のあとプレハーノフの死にいたるまでの時事論説に、第26巻は伝記文献集にあてられるはずであった¹¹⁾。しかしじっさいには、第23巻に予定されていたロシア社会思想史の資料が第24巻をも占め、そして当初予定されていた第24、25、26巻は立ち消えになった。それによって『著作集』は、印刷されたプレハーノフの書き物をすべて収録したものではなくなった¹²⁾。『著作集』のこの計画変更は、1922—23年ごろと1927—28年ごろの党の出版政策の変化に関連しているのかも知れない。

『著作集』がプレハーノフ全集ではない理由のひとつは、いま述べたところであるが、『著作集』はさらに、プレハーノフの印刷された論稿だけを収録するという編集方針それ自体からしても、全集といいがたいものをもっている。すなわち、『著作集』にはプレハーノフの書簡や草稿類はいっさい入れられていない。『著作集』は次節で述べるように、実はそうしたものを利用する便宜をもたないで編集されたのである。

II 『プレハーノフ遺稿集』と『プレハーノフ哲学選集』

プレハーノフが1918年5月、フィンランドのテリオキイのサナトリウムで死

11) Г. В. Плеханов, Соч., I, стр. 10.

12) 第1次世界大戦勃発から死にいたるまでの時期のプレハーノフの時論は、Г. В. Плеханов, О войне, Петроград (n. d.), および Г. В. Плеханов, Год на родине, т. 1-2, Paris, 1924, にあつめられている。京大経済学部資料室の甚力によって、『戦争について』(第5版)および『祖国にての1年』第1巻のマイクロをバリの Bibliothèque Nationale から入手することができた。『戦争について』はブルガリヤの社会主義者にあてた書簡2通(1914年10月27日, 1915年5月8日)を内容とする85ページの冊子。『祖国にての1年』は、Ю. Арзаев「プレハーノフ, 1857—1918 (略伝)」約50ページが前につけられ、本文は1917年4月—同年6月に『エジンストヴォ』紙にけいさいされたプレハーノフの論説をすべて収録している。第2部はそれにつづくものを収めているものと思われる。第1部は伝記をのぞいて本文247ページ。

んだとき、かれの蔵書、草稿、ノート、かれが受けとった書簡類（一括してプレハーノフ文書と呼ぶ）の大部分は、かれが長年住んでいたジュネーブの宅、イタリアのサン・レモに、ごく一部がペテルブルクにあった¹³⁾。プレハーノフ未亡人ロザリヤ・プレハーノヴァはプレハーノフの死後、2人の娘とともにパリに落ちつき、医者として生活をたてながらプレハーノフ文書をあつめることにつとめたが、在イタリア部分は1923年によく手もとに到着した。

プレハーノフ文書のことは、プレハーノフの旧友デイチ（1855—1941）を通してレーニンに知られ、デイチが交渉役になって、プレハーノフの遺族との間に、1922—23年に話し合いがすすめられ、その結果、プレハーノフの遺族はプレハーノフ文書の一部がソビエトで刊行されることを承諾した。ただしその承諾は、プレハーノフ文書の刊行が、党史編集委員会およびマルクス・エンゲルス研究所（『著作集』はマルクス・エンゲルス研究所の仕事であった）から独立におこなわれ、かつ刊行されたプレハーノフ遺稿は、将来つくられるべき決定版プレハーノフ全集のなかに入れられることを、条件としていた。この条件は微妙である。プレハーノフの遺族は、最後はボリシェヴィキの敵として死んだプレハーノフであるだけに、プレハーノフの論稿が完全なかたちで復元されることを切に望んだのであろう。デイチ編『「労働解放」団』全6巻《Группа 'Освобождение труда'》т. 1-6, Москва, 1924-28 はそのような約束にもとづいて、プレハーノフ文書の一部を利用してつくられた。他方、リャザーノフはプレハーノフ文書を直接に利用する便をもたないで、『著作集』を編まなければならなかった。『著作集』において、プレハーノフ文書が利用せられているのは、第18, 24巻にデイチ編『「労働解放」団』からの転載2篇があるだけである。

さて1922—23年の約束は、プレハーノフ文書の利用権についてであって、所

13) 女医であった妻のロザリヤは、1908年にサン・レモにサナトリウムをつくり、結核を固疾としたプレハーノフはその後毎年冬をそこで過していた。プレハーノフは1917年3月急いで帰国し、蔵書類を持ちかえる余裕がなかったのである。Литературное наследие Г. В. Плеханова, Сб. I, 1934, стр. 7. プレハーノフ文書とプレハーノフ館については、там же, стр. 5-10, および И. Н. Курбатова, "Материалы архива Г. В. Плеханова", Вопросы философии, 1964, No. 2, стр. 138-144, に拠る。

有権についてはなかったが、ブレハーノフの遺族は、ブレハーノフ文書はやはりブレハーノフの祖国にかえすのが故人の素志に添うものと考え、西欧の図書館・研究所からの購入申込みを断って、1927年、文書一切をソビエトに寄贈することにきめた。その条件として、文書一式はレニングラード公共図書館の管理下におかれ、同図書館の分室としてブレハーノフ館 Дом Плеханова がつくられて、そこにブレハーノフ文庫として収められること、ブレハーノフ館には専任スタッフが配置され、ロザリヤ・ブレハーノヴァがその主任になることが、とりきめられた。1928年春、ブレハーノフ文書一切のほかブレハーノフの書斎の備品類などもレニングラードに着き、1930年春、ブレハーノフ館が完成した。ロザリヤはパリの病院を閉じて、亡夫の遺稿の整理刊行に余生を捧げることになった。

ブレハーノフ文庫にあるブレハーノフの蔵書は約8,000部であって、その多くにはブレハーノフの書きこみがある。蔵書の内訳は、哲学、経済学、歴史が多く、芸術、文学、人種学関係は量は多くないが、貴重書が多いと伝えられている。ノートは200冊以上で、その大部分はブレハーノフによる抜書きと評注である。ブレハーノフ文庫の中心はやはり草稿・書簡であるが、草稿類は完成稿、同一テーマについての数種の手稿、講演の手控え、講義案、いろいろの覚え書など多数にのぼり、書簡は発受信あわせて約5,000通、ほかにザスーリッチの文書などもある。

『ブレハーノフ遺稿集』全8冊《Литературное наследие Г. В. Плеханова》, Сб. 1-8, Москва, 1934—40は¹⁴⁾、ブレハーノフ館のスタッフがブレハーノフ文庫の資料によって印刷原稿をつくり、ロザリヤをくわえた編集者団の編集で、不定期的に刊行された¹⁵⁾。大きさは第2集だけが150ページ、他は350—450

14) 『遺稿集』は第7巻だけが現物で、他の巻はマイクロフィルムで京大経済学部図書室にある。

15) 『遺稿集』は刊行主体たる国立出版所の理事会が編集スタッフを任命し、その指導のもとでブレハーノフ館の専任研究員が仕事するという形ですすめられた。編集者ははじめ А. В. Луначарский, Ф. Д. Кретов, Р. М. Плехановаであったが、ルナチャルスキーは第1集の出版前に死んだ(1933年2月)。第2—4集の編集者は Ф. Юдин, И. Д. Удальцов, Р. М. Плеханова, 第5—8集ではウダリツォフのかわりに М. Т. Иовчук が入っている。『遺稿集』のじっさい

ページぐらいである。『遺稿集』は『著作集』とはちがって、プレハノフの生前には印刷されていない草稿、書簡、ノートを主体としている。一部はすでに印刷されたものを収めているけれども、それは補足である。

『プレハノフ遺稿集』の要覧

I 1880年代—1890年代はじめのプレハノフの未刊論稿

「フェルジナンド・ラッサール」草稿、チュルヌイシェフスキー関係草稿、ナロードニキ時代の草稿、「労働解放」関係の書簡多数。1934年刊。

II メーデーの論稿と演説

時期を問わず、ロシアのメーデーおよび国際的メーデーについての論稿および書簡をあつめている。1934年刊。

III 芸術

「宛名のない手紙」第4—第6の草稿、異稿、芸術に関する講演の手控え、展覧会・音楽会についての批評など。1936年刊。

IV ナロードニキ主義との闘争

主として1892—97年におけるナロードニキ批判の草稿。「史的・一元論」現行版とは異なる草稿、1894—96年のプレハノフの書簡。1937年刊。

V 哲学的修正主義との闘争

1894—95年のマルクス批判に対する反批判論稿、ベルンシュタイン主義、マッハ主義、ボグダーノフ派に対する批判の草稿、科学的社会主義に関する論稿、哲学問題に関する書簡、デイチ編『「労働解放」団』からの転載をふくむ。1938年刊。

VI 文学、批評、ロシア哲学

「ロシア社会思想史」の資料をなすゲルツェン、ベリンスキー、ドブロリューボフ、トルゲーネフなどに関する草稿、イプセンその他の外国文学論、ゴリキーとの往復書簡、その他。1938年刊。

VII 宗教および求神主義に対する闘争

の仕事をしたプレハノフ館員は、A. C. Волин, B. C. Коп, Т. З. Лукашевский, Д. С. Махлин で、このうちマフリンは第1集だけに参加。ロザリヤ・プレハノヴァは実際の仕事をも分担しており、各巻ともに「ロザリヤ・プレハノヴァの密接な参加のもとに成った」と記されている。

講演「科学的社会主義と宗教」の梗概(1905),『著作集』第17巻所収の宗教・求神主義批判論文の再録,分離派に関するノート,書簡。1939年刊。

VIII 「労働解放」団, 第1部

「労働解放」団の20年間の活動をあきらかにすることを主眼とする論集の第1部で, 1883—94年のブレハーノフの社会・政治論稿, および書簡。『著作集』と部分的には重なる。1940年刊。

『遺稿集』は草稿と書簡を読みうるようにしてくれた点で,『著作集』を補足する貴重な存在である。『遺稿集』は, 編集部およびブレハーノフ館の前書き, 収録各論稿・書簡についてのくわしい注, 各集ごとの事項・人名・文献索引, ブレハーノフの写真や草稿の写真まで添えられ, たいへん丹念につくられている。その点,『著作集』とはまったく異っている。

『遺稿集』は, 第1集の序文によれば, 10—12冊になるはずであった¹⁶⁾。しかし, 第8集で中絶した。それは直接には戦争のためであったといわれているが¹⁷⁾, 戦後も続巻は出していない。だから『遺稿集』は一応8冊でおわったとみるべきであろう。そうすると,『遺稿集』の収録範囲は『著作集』のそれにくらべてせまくなっていることに気づかれるであろう。『著作集』では第1次世界大戦勃発後の綱領・戦術関係だけが省かれたのであるが,『遺稿集』は1903年以後の, いわゆるメンシェヴィキの時期の綱領・戦術関係をすべて除いている。また,『遺稿集』の第3集までの編集部序文は資料と編集方針について述べていただけであったのに, 第4集以後には, レーニン・スターリンを引用して, ブレハーノフのよいところとわるいところをあきらかにする, 思想善導的性格をもつ序説がつけられている。『著作集』と『遺稿集』との収録限界の差に1920年代と30年代とのちがいが, スターリン権力の確立以前と以後のちがいがあらわれているとすれば,『遺稿集』第4集からの変化には, スターリン的党学の強化過程が反映されていると考えられよう。

16) Литературное наследие. Г. В. Плеханова. Об. I, 1934. стр. 4.

17) И. Н. Курбатова, указ. соч., стр. 139.

1956年はスターリン批判とハンガリヤ動乱の年であるが、この年はブレハーノフ生誕100年に当たっていて、ブレハーノフに関するたくさんの小冊子や論文が出た¹⁸⁾。それだけでなく生誕100年を記念して、『ブレハーノフ哲学選集』全5巻《Г. В. Плеханов, Избранные философские произведения》т. 1-5, Москва, 1956-58 が刊行されはじめた。各巻800—900ページ、ソビエト科学アカデミー哲学研究所がブレハーノフ館の協力をえて編集し、テキストは『遺稿集』その他のブレハーノフ文書と照合されており、かなりくわしい注がつけられ、各巻末に人名索引、第5巻には通巻事項索引が添えられている。そういう点で精度のたかい大冊の選集が短時日の間に刊行できたのは、ブレハーノフ館の地味な長年の仕事が基礎にあったからこそであろう¹⁹⁾。『哲学選集』の注には『遺稿集』の仕事が多く利用されている。『哲学選集』は『著作集』・『遺稿集』とはちがって、わが国へも多くの部数が入ったはずである。

『哲学選集』の各巻にはサブ・タイトルがない。各巻について記入したのは、わたくしが仮につけた名称である。

『ブレハーノフ哲学選集』の要覧

I ロシア・マルクス主義創設期の著作

「社会主義と政治闘争」(1883)から「史的一元論」(1895)にいたる10篇。哲学以外の、政治論・綱領関係をもふくむ。

II 史的唯物論と唯物弁証法, 1896—1903年

上記の期間におけるマルクス主義哲学擁護の論稿、書評をふくめて23篇。うち6篇がナロードニキ批判、他は西欧およびロシアにおけるベルンシュタイン的修正主義批判である。「歴史における個人の役割」(1898)、「唯物論かカント主義か」(1898—99)、その他。

18) ブレハーノフに関する小冊子(いずれも50ページ程度)が5つと、論文16篇が1956年に出ている。

19) 『哲学選集』の編集者はИ. Т. Иовчук, А. Н. Маслин, П. Н. Федосеев, В. А. Фомина, В. А. Чагин。テキストの校訂と注の責任者はЕ. С. Коц, И. С. Веленкий, С. М. Фирсова, В. Л. Янсонであるから、注15)と照合してみると、『遺稿集』の刊行にたずさわったひとびとと『哲学選集』のそれとが、かなり重なっていることがわかる。

III 史的唯物論と唯物弁証法，統，1904—1913年

「マルクス主義の根本問題」(1908)、「戦闘的唯物論」(1908)ほか、書評をふくめて23篇。観念論，経験批判論，経験一元論，求神主義などに対する論争が中心。

IV ロシア哲学思想史

1890—1913年の間の論稿で上記のテーマのものをあつめるが、社会思想，経済思想に関するものも入っている。主篇はチュルヌィンシェフスキー論，ついでペリンスキー論，ゲルツェン論。書評をふくめて計27篇。

V 文学・芸術論

1888—1913年の上記テーマに関する論稿，書評をふくめて19篇。「宛名のない手紙」(1899)、「18世紀フランスの戯曲文学と絵画」(1905)，トルストイ論，イブセン論，その他。

『哲学選集』の序言には「プレハーノフの哲学に関する著作の，もっとも重要で貴重なものを取める」²⁰⁾と述べられている。もともと選集であるから哲学関係論稿のすべてを網羅しているのではないけれども，要覧から知られるように，哲学という語はもっともひろい意味に用いられしており，またとくに第1巻には，いかなる意味においても哲学とはいえないものまで収められている。収録論稿の大部分は『著作集』にあるが，一部は『著作集』にはなくて『遺稿集』にだけあるものが入れている。

『哲学選集』はプレハーノフの著作を多くのひとに近づきやすくしてくれた。しかし，その編集方針は，あまりにも正統マルクス主義的著作に限定されすぎていると思わずにはいられない。たしかに，これは全集ではなくて哲学選集なのだから，そして哲学はプレハーノフの諸著作のうちでもっとも正統マルクス主義的な分野なのだから，そうなるのは当然だ，と一応はいえるであろう。しかし，実はそうばかりでもない。さきにも指摘したようにロシア・マルクス主義の創設期のプレハーノフ，すなわちレーニンがもっともたかく評価した時期のプレハーノフの著作については，哲学以外の，綱領関係文書まで収録しているが，その後の時期の綱領関係文書は収録していない。他方，プレハーノフ晩

20) Р. В. Плеханов, Изб. филос. произв., т. I, 1956, стр. 5.

年の「ロシア社会思想史」の「序説」は、ブレハーノフの史的唯物論解釈として当然『哲学選集』にとりいれられるべきであると思われるのに、除外されている。『哲学選集』は、一方では1883年以前のナロードニキ時代の著作を、他方では第1次世界大戦勃発後の社会愛国主義時代の著作（理論的著作）を収録していない。編集部は、レーニンがたかく評価したものだけを選集に入れるのがレーニンの原則であると思っているらしい。『哲学選集』は注などの精密化にもかかわらず、収録限界は『遺稿集』よりもいっそうせまくなった。『遺稿集』第4集からはじまった、ブレハーノフの評価をあらかじめ与えておく「序説」の形式は、もちろん『哲学選集』にひきつがれている。

『哲学選集』の第1巻は英訳されたが²¹⁾、第2巻以後は出ない。文学・芸術論については、『哲学選集』よりさきに『ブレハーノフ 芸術と文学』(Г. В. Плеханов, Искусство и литература) Москва, 1948の1巻本があり、東ドイツでその独訳²²⁾が出ているが、『哲学選集』完結の年にさらに『ブレハーノフの文学・美学観』2巻本《Литературно-эстетические взгляды Г. В. Плеханова》Москва, 1958, т. I, II が Б. И. Бурсов の編集で刊行された。『哲学選集』のあとに『ブレハーノフ社会経済史選集』が予告されていたが実現しなかった²³⁾。1964年にソビエト科学アカデミーは、哲学研究所とブレハーノフ館の協力(『哲学選集』と同じ)によって、『ブレハーノフ哲学遺稿集』全3巻《Философско-литературное наследие Г. В. Плеханова》を刊行することを決定したと伝えられ、それには稀覯本の『労働解放』団と『ブレハーノフ・アクセルロート往復書簡』のもっとも興味ある部分が盛りられるはずであるという²⁴⁾。おそらく、それは『哲学選集』を補足するものであろう。「労働解放」団時代

21) G. Plekhanov, *Selected Philosophical Works, in Five Volumes, Vol. I, FLPH.*, (n. d.).

22) G. W. Plechanow, *Kunst und Literatur*, Berlin, 1955, 1034ページの大冊である。

23) Г. В. Плеханов, *Избранные историко-социологические произведения в 6 томах*, Соцэк. «Наукаの窓」1960年、第10号、35ページ。ブレハーノフ18巻選集も予告されており、ともに同年の《Новые книги》に拠ったものだが、いずれも刊行中止になった。

24) И. М. Курбатова, указ. соч. стр. 139-140. クルバートヴァは1964—66年刊行予定と書いているが、京大経済学部資料室からブレハーノフ館への問い合わせに対する1965年11月23日付返書によれば、1966年に第1、2巻、1967年に第3巻刊行の予定であるという。

のプレハーノフの書簡・草稿類はそれによって近づきやすいものになるだろう。

しかし、プレハーノフ全集の企画はたてられていない。かつてリャザーノフが『著作集』の方針とした、印刷されたプレハーノフの著作を全部集めることも、まだ実現されていないし、書簡等をもふくめたプレハーノフ全集の刊行の声も聞かれない。資料はある。プレハーノフ館のスタッフの文献学的力量も証明済みだろう。問題はスターリン的党学の発想法をぬけ出せない科学アカデミーの幹部たちにあるのだろう。プレハーノフのメンシェヴィキ時代あるいは社会愛国主義時代の時論を刊行しても、ソビエト社会になんらかの政治的衝撃を与えることなど、あるはずがない。ソビエトの市民たちに、プレハーノフの全貌を知ることさえさせるだけである²⁵⁾。その点、トロツキー(1877—1940)の復権問題などとは全然異なるのだ。しかしプレハーノフの著作刊行史の問題は、ことが些細であるだけに、かえって象徴的であるともいえよう。もし近い将来にプレハーノフ全集が刊行されるならば、うれしいことである²⁶⁾。

〔追記〕プレハーノフの邦訳については、川内唯彦訳『史的一元論』下(岩波文庫、改訂版、1963年)の巻末に、一覧がかかげられている。それに私がしらべたものを加えたリストを作成したが、制限紙数を越えるため、プレハーノフの経済思想に関するソビエト文献のリストとともに割愛し、別の機会に発表する。

25) メンシェヴィキ時代ないし社会愛国主義時代のプレハーノフの時論は、プレハーノフ研究者には参照されている。その意味では隠されているわけではない。しかし、市民一般は正統的マルクス主義の折紙のついたプレハーノフの著作だけを読む仕組みになっている。

26) 以上の著作刊行史によって知られるように、『著作集』が現在においてももっとも包括的なプレハーノフ著作集であるから、主としてそれに拠るほかないが、『哲学選集』にも入っているものは、テキストの精度のたかい後者に拠るのが妥当であると思われる。